

おじいちゃんの変さ点

千葉県 千葉市立土気南小学校三年

富澤 晃士朗

ぼくのおじいちゃんは、七十一才。ぼくの家のすぐ近くにすんでいる。ぼくが生まれる前、じゅう道をしていたおじいちゃんは、山のように大きくて、手もクマのようにぶあつい。そして、とてもやさしい。

ぼくが小学校に入学した時に、おじいちゃんは、セイフティウォッチャーになった。こどもたちが、安全に登校できるように、黄色いはたを持って交差点で見守るし事だ。

おじいちゃんは、毎朝、ぼくの登校路のキー屋さんの交差点に立つようになった。晴れた暑い日も、つめたい雨の日も、雪がふる日も毎日毎日だ。

一年生。ぼくは、交差点におじいちゃんが見えると「おじいちゃん」と大きな声でよんでいた。おじいちゃんは、「おうっ」と答えるあつい手をふる。ぼくがその手をにぎり、「いっしょに学校まで行ってよ」とたのむと、きゅつとにぎり返し、学校までおくつてくれる。ぼくは、大きくて、やさしいおじいちゃんを自まんするように歩いていく。学校につくと、ぼくの頭をくしゃつとなでる。

二年生になった。学校に友だちがたくさんできた。友だちと登校するようになった。サッカーのことや、きのう見たテレビのことを話しながら歩いていくと、あつというまにおじいちゃんの変さ点につく。いつのまにか、交差点に立っているおじいちゃんにかけよる事も、手をきゅつとにぎる事も、もちろん、頭をくしゃつとなでられることもなくなつていった。交差点をふ

り返るとおじいちゃんは、やさしい目で見ている。心がズキツてした。

だから、三年生になって、しばらくした朝、ぼくは、おじいちゃんのある交差点を通らないで学校に行った。夜、し事から帰ってきたお母さんに、「今日、いつもとちがう道で学校に行った？ おじいちゃん、交差点に来なかったから、こうしろうがカゼでもひいたのかと心ばいしていたよ」と言われた。ギクツとした。お母さんは、話し続けた。「あとね、毎朝こうしろう見ることがおじいちゃんの元気のもとだつて。小さかったのに、友だちがたくさんできて、大きくなつていくことがうれいって言つてたよ」ぼくは、むねが、ギューつてなつて、なみだがぼろぼろ出てきた。おじいちゃんの家に向かって、げんかんですこい大きな声で言つた。「おじいちゃん、ぼくカゼひいてない。元気。ごめんなさい。」おくから出てきたおじいちゃんは、ぶあつい親指で、ぼくのなみだをぬぐつて「おうっ」とやさしくうなづいた。

今日もおじいちゃんは交差点に立っている。友だちと交差点をわたりながら、おじいちゃんの手にタッチする。ふり返ると、おじいちゃんはやさしくうなづく。おじいちゃん、いつもぼくを見まもつてくれてありがとう。ぼくが大きくなつていくことも見まもつてくれてありがとう。おじいちゃんとおじいちゃんのおあつい手が大きすぎです。